事例　その他	☆本事例の中心人物
県立大学統合後の地域と密着したブランド戦略 **～県立広島大学～**	同窓会 事務局長 学長

事例内容

【概要】

県立広島大学は平成 17 年度に、歴史、文化、地域の違う 3 つの県立大学、すなわち県立広島女子大学(濫觴から統合までの歴史は 85 年、昭和 40 年 4 年制大学化、広島市)、広島県立大学(昭和 15 年、平成元年 4 年制大学として開学、庄原市)、広島県立保健福祉大学(平成 10 年、平成 12 年 4 年制大学化、三原市)が統合され、新たな県立大学として出発した。

統合を契機に、従来は県民に見えにくかった県立大学の姿を理解してもらえるようにすること、県立大学の経営効率を向上させ、議会・県民に対し県税を使う大学として説明責任を果たすこと、統合による融合効果を大学の教育力・研究力の向上につなげていくことが課題となっている。統合に積極的とは言えなかった同窓会組織なども協力して、種々の共同の取組みが行われており、県立大学の新しいブランド作りに努めている点が注目される。

【背景】

県立広島女子大学の歴史は、大正 9 年の広島県立広島高等女学校専攻科に始まり、昭和 3 年には県立高女の保護者と卒業生の陳情活動、募金活動を経て、前身である広島女子専門学校が開設され、戦後昭和 40 年に広島女子大学として開学した。また広島県立大学は、県北部・内陸地域における教育研究の拠点として、当該地域の文化の向上と産業の振興に寄与するものとして平成元年開学した。広島県立保健福祉大学は、保健・医療・福祉の分野で包括的な視野に立ってリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指して、平成 12 年に開学した。

それぞれの県立大学の設置は、その時代における、県政の課題や地域住民の願いを強く反映したものであったが、県政全般の運営を効率化する上でも、また県全体の高等教育政策の一貫性を追求する上でも、さらに県民への説明責任を果たすためにも、3 大学の統合は必然の流れであった。

しかしながら、統合・学部再編に伴い学生減となるキャンパスの地域への配慮が必要で、また、県立広島女子大学は戦前より社会から高い評価を受けており、他の 2 大学は、歴史は短いがそれぞれ高度な研究や優秀な教育を自負してきたため、各関係者や同窓会は統合に消極的であった。そのような状況の中にあって、3 つの県立大学の文化や特色を生かした大学作りをし、新大学が県民に親しまれ信頼されるブランドを構築し得るかどうかが、統合の成功を左右するものであった。

【取組み内容】

①旧 3 大学文化の融合による相乗効果の追求

統合時に外部から招聘された学長はトップダウンを避け、「地域に根ざした県民から信頼される大学」という理念のもと、互いのキャンパスの教育・研究内容を認識し、交流し、それぞれの個性と長所を評価することから改革を開始した。キャンパスの融合を目指したこの活動は、これまで埋もれていた優れた研究成果や教育実践を発掘する取組みともなり、それを進める中で地域の自治体、個人から課題を募集し、学内の教員が研究し成果を発表する地域課題研究へと繋げている。

また、県内のキャンパス毎の地域振興の取組みを全県的・組織的な取組みに広げ、全国初となる大学と商工会連合会の連携・協力に関する協定締結を行うほか、自治体・企業等と協定を結び講座などを開催

している。一例として、ひろしま美術館との連携公開講座などを開いている。

②旧3大学の同窓会の統合と共同の取り組みの推進

旧大学の統合に際しては、歴史、地域の違いが大きく、先に述べたようにとりわけよき伝統を長く誇りとしてきた県立広島女子大学の同窓会では、できれば統合を避けたいという気分が濃厚であった。しかしながら、事務局長等、県の担当者が丁寧に説明を重ねて理解を深め、その結果当時の各大学同窓会長がこぞってリーダーシップを発揮し、そのもとで同窓会としても統合を決意し、今後の県立大学の発展を支援するという理解を得た。

統合後は、それぞれの同窓会がキャンパスツアーを主催して、それぞれの地域から他地域のキャンパスへ学生や地域住民を定期的に訪問させるなど、学生の支援も含め新しい県立大学を支援している。

③公立大学法人化

統合時には、3 つの大学の文化の融合が最優先されたため、法人化の取組みは後に回ったが、今後は一つの大学として運営を効率化し、県民･地域によりよく理解・活用してもらえるものにしていくために、平成 19 年度に公立大学法人として新たなスタートを切る。

【結果】

統合の結果として様々な以下の効果が生まれた。

①現代GPが平成18年度において2件採択され、科研費の申請率もアップし、大学全体の取組みに対する学内の協力体制の充実が図られた。

②これまでに遅れていた FD の取組みが充実した。

③3 大学の学生文化の融合により、学生に活気が生まれ、また学生による授業評価を実施することで、授業内容の向上に繋がった。

☆成功のポイント

①統合後、互いの文化を理解することが、学内の教育研究資産を再認識する機会となった。

②成果を見えるような形にする活動を行えるようになってきた。

③統合へ消極的であった同窓会が、統合を乗り越えた後は、従前にも増して支援体制を強化してくれた。

④統合後に法人化するという計画を策定し、それぞれの大学の文化を大切にし、融合していく取組みに専念した。

★今後の課題(展開)

①県立広島大学のブランドとは何かということをまだ十分に明確にできていない。

②県のブランドと、県立広島大学のブランドの融合をはかり、広島県をアピールできる大学にし、全国の受験生から県立広島大学に入学したいと思われるような魅力作りと広報を行っていく。

○委員の所感

キャンパスが離れているデメリットを、県全体に対して県立大学が役割を果たせるメリットと捉え直しているが、その視点を、交流ツアーなど同窓会の支援活動から得て、互いに協力関係を結んでいることが心強い。

また、統合や法人化への学内の反対意見に対し、説明会を繰り返し開催し、丁寧な協議を続けた学長の粘り強さも成功に結びついていると思われ、経営学の権威であるとともに、大学全般への幅広く柔軟な理解力を持つ学長のリーダーシップには注目すべきものがある。「異文化の融合によって、今まで隠れていた学内の業績が次々と明らかになり、それらのシーズを様々な取組みに結びつけるのに役に立ちつつある」という学長の言葉が印象に残った。